The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
2000, Vol.2, No.1, 91-98

ISSN 1344-7505

自閉症児におけるコミュニケーション機能に関する検討

李　玄玉*

A Study about the Communications Function in Autistic Children

Abstract

This research aimed to analyze the communications function at the voice and non-voice level for the autistic children, and to examine the feature.

As a result,concentrated on the tool function to try to receive the thing and servicefrom others, and the feature almost limited to the WH function was admitted about a practical function of talking to in the autism child in responded utterance when characterizing. Moreover, the problem of the communications action in the autistic children of this research was thought to take a conventional style fromwhich a voluntary utterance was related to the narrowness of the interest and the concern and the language expression was made a pattern.

Mother's word is seen in the autistic children of this research and, the imitation of such a word was not seen to develop into the exchange play at all though the imitated action was seen at once. It seemed to be related to the narrowness of the interest and the concern from which such a problem was observed by this autistic children.

本研究は、自閉症児を対象にして音声並びに非音声レベルのコミュニケーション機能を分析し、その特徴を検討することを目的とした。その結果、自閉症児における話しかけの実用機能の特徴としては、他者から物やサービスを得ようとする道具機能に集中しており、応答的発話においてもほぼWH機能に限られている特徴が認められた。また、本研究の自閉症児におけるコミュニケーション行動の問題は、自発的発話が興味・関心の狭さと結びついており、かつ言語表出がパターン化された紋切り型のスタイルをとっていることと考えられた。

そして、本研究の自閉症児では母親のことばを即時に模倣する行動が見られたが、このようなことばの模倣がやりとり遊びへ発展することは全く見られなかった。このような問題も本自閉症児で観察された興味・関心の狭さと関連しているように思われた。

Key words: Autistic children　Communication function　Utterance act

I. はじめに

Kanner(1946)は自閉症児の言語を即時反響言語、遅延反響言語、人称代名詞の逆用、隠喩的代用などによって特徴づけている。

今日では、幼児言語発達研究の知見に基づいて自閉症児の言語を音韻論、統語論、意味論、語用論の諸側面に分けて論じられるようになってきた。特に、言語の伝達

* 九州看護福祉大学社会福祉学科

機能は、語用論、会話機能とも呼ばれ、最近10年間の幼児言語研究の中で最も関心が持たれてきた領域であり多くの研究が行われている (Bates, E., 1976; Dore, J., 1975; Halliday, M.A.K., 1975; McShane, J., 1980)。

Bates(1976)は、語用論を「文脈の中での言語の使用を支配している諸規則」と定義し、「意味論的なもの統語論的なものが語用論的なものから派生する」と述べている。

こうした語用論的観点は自閉症児の言語の機能面の特徴を再検討する上で極めて有効と考えられる。特に、自閉症児の場合にはエコラリアをはじめとして言語使用に問題がある子どもが多いが (Kanner, 1943; Paluszny, 1979)、これらを単に不適切だとして片付けることには問題がある場合があり (Schreibman and Carr, 1978; Durand and Crimmins, 1987)、十分な機能分類をする必要があると思われる。これらは発話の機能と言語反応型が一致していないが、その先行事象と結果事象で捉えることは可能であろう。

つまり、自閉症児の言語障害を解明するためにはコミュニケーション機能の偏りから自閉症児をいくつかのタイプに分類し、各タイプに属する子どもの言語指導を検討する必要があると考えられる。

そこで本研究では、自閉症児における音声並びに非音声レベルのコミュニケーション機能を分析し、自閉症児の言語発達の特徴及びコミュニケーション機能の偏りを検討することを目的とした。

Ⅱ. 研究の方法

1. 対象児

● S・I児（女）

S・I児は1988年10月生まれの女児で初回観察時 CA 4:02であった。家族構成は、両親と本児の3人である。周産期には特に異常はなく正常分娩であった。出生時体重は3.0kg。歩行開始は1歳2カ月、始語としては1歳8カ月頃に「パパ」「ママ」などがあった。2歳頃よりことばが減り、3歳時にA児童相談所を受診した。そこで「自閉症」との診断を受けた。ことばが減り始めた頃から固執傾向、孤立的で一人遊びのみ行うなどの行動特徴が出現している。

● T・W児（男）

T・W児は1989年12月生まれの男児で初回観察時 CA 3:03であった。家族構成は、両親と兄の4人である。正常分娩で出産時体重は3.2kgであった。歩行開始は1歳3カ月で歩き始めたら多動状態になった。ミニカー、ジュースのびん等を並べることに固執する行動が認められた。2歳頃初めて意味のあることばを言った（ワンワン、これ、ジュース、バイバイなど)。しかし、2歳半過ぎに消えてしまった。2歳8カ月にD大学付属病院で「自閉症」との診断を受けた。

2. 手続き

対象児と母親の一対一の自由遊び場面を月に一度40分間ずつ6カ月間、VTRに録画した。プレイルームの中には紙とペン、絵本、玩具の電車、パズル、積み木、ボールなどを置いた。遊びに対しては統制を加えず、できるだけ通常の形態をとってもらうことにした。

3. 結果の処理

VTRに録画された子どもと母親の身振り・動作、視線、発話はコミュニケーション活動の文脈と関連づけられながら抽出し記録用紙に整理した。次に、記録用紙の中から、子どものすべての発話と身振り・動作について、コミュニケーション機能の主要なカテゴリーに分類し各カテゴリーごとに再整理した。

言語の認定は一定の意味を一定の音声で表していることが明らかなものとし、同一の語が繰り返された場合は、全体で一語とした。また発話間の境界決定は、休止とイントネーションを優先させて行った。

4. 分　析

1) 発話の伝達性と情報性

発話の伝達性と情報性を調べるために個々の発話をその文脈上の地位によって分類した。資料の分析にあたっては次の6つの基準と綿巻・西村・佐藤(1984)を参考にして行った。

① 発話の内容が話者の行動や周囲の状況と関連をもつか。

② 発話に伝達意図があるか。

伝達意図の有無は話者が聴者の方を注目する聴者の方に接近するなどの行動が発話に伴うかどうかによって決定した。

要求や命令のように聴者に何かすることを求める発話は、こうした行動上の特徴がみられなくても伝達意図があると判定した。

③ 話者がイニシャティブを取った発話が相手の話しかけに応答した発話か。

④ 発話が話者のオリジナルなことばで作られている

か、先行する他者のことばを引用しているか。

⑤ 発話が自発的に出されたか、相手からの積極的な働きかけによって引き出されたか。

⑥ 他者のことばを模倣した場合、それが単なる模倣か、それとも他者のことばを共有、同化しようとしているか。

以上の基準にしたがって発話が伝達的であったか、非言語的文脈に適合していたか、自発的であったかという3つの基準を最も重要視して分類した。

Ⅲ. 結　果

1. 発話の伝達性と情報性

各対象児の発話は伝達的発話、情報的発話、不適切な発話、曖昧な発話に分類し、それぞれの発話数と総発話数に対する割合を Table 1 と Fig. 2 に示した。

S・I児の場合、伝達的発話の頻度が最も高く全発話の50.8%を占めている。不適切な発話は、全体の36.1%を占めており情報的発話は9.9%で非常に少なかった。T・W児の場合は、情報的発話が全発話の63.4%に達しており伝達的発話は非常に少なく22.6%を占めていた。不適切な発話は全発話の11.9%でS・I児に比べるとかなり少なかった。つまり、S・I児は言語を伝達的に使用している反面、不適切な発話も多くみられた。これに対してT・W児は不適切な発話が少ない一方で、伝達的発話もあまり多くなくその代わりに非言語的文脈に適合する独語が最も多かった。すなわち、T・W児の言語は非言語的文脈との結びつきという観点からみると情報性をもつといえるが、伝達性の観点からみると多分に伝達性を欠く言語であると思われる。

Table 1 自閉症児における発話のタイプとその出現頻度

発話の類型	S.I 児(自閉症児)			T.W 児(自閉症児)		
	4:2-4:3	4:4-4:5	4:6-4:7	3:3-3:4	3:5-3:6	3:7-3:8
伝達的発話	188(50.8)			176(22.6)		
・話しかけ	42	39	41	39	37	35
・応答	27	24	22	20	19	26
情報的発話	38(9.7)			491(63.4)		
(文脈適合独語)	12	8	18	162	166	164
不適切な発話	139(36.1)			92(11.9)		
・不適切な応答	4	3	1	2	1	1
・文脈不適合独語	25	26	25	15	19	17
・単なるおうむ返し	6	4	7	5	4	5
・質問のおうむ返し応答	14	11	13	6	9	8
曖昧な発話	14(3.4)			16(2.1)		
・話しかけか文脈適合独語か	2			2	1	2
・質問のおうむ返し応答か模倣的応答か	4	2	1	3	2	2
・単なるおうむ返しか同化模倣応答か	2	1	2	1		3
計	138	118	127	255	258	262

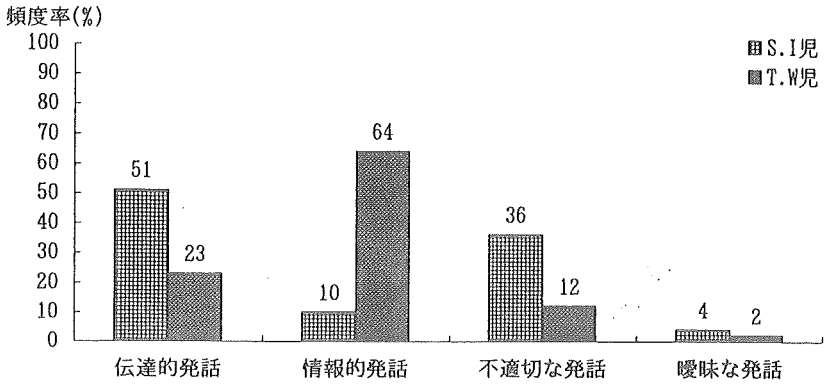

Fig. 1 自閉症児の発話のタイプとその出現率

Table 2 不適切な発話の出現頻度

発話の類型	S.I 児(自閉症児) 発話数 (%)	T.W 児(自閉症児) 発話数 (%)
不適切な応答	8 (5.7)	3 (3.2)
文脈不適合独語	76 (54.6)	51 (56.1)
単なるおうむ返し	17 (12.3)	14 (15.4)
質問のおうむ返し応答	38 (27.4)	23 (25.3)
計	139 (100.)	91 (100.)

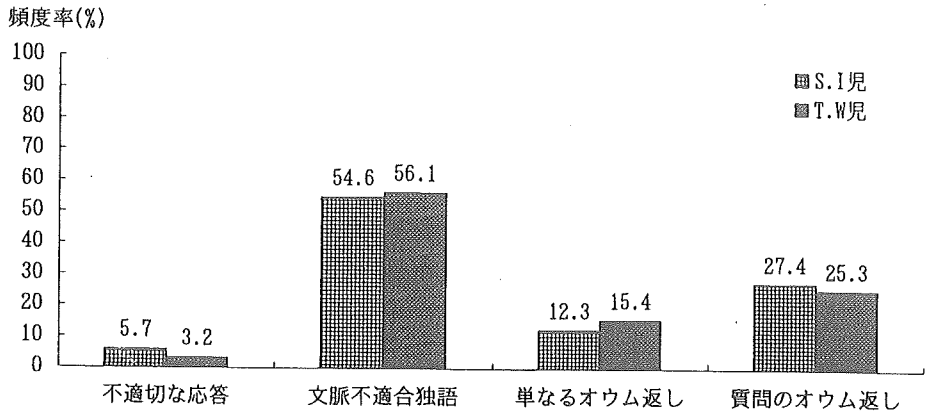

Fig. 2 不適切な発話の出現率

一方、不適切な発話におけるＳ・Ｉ児とＴ・W児はその発話数や全発話に占める割合にかなりの差がみられた。しかし、不適切な発話だけを取り出してその下位型の内訳(Table 2 ,Fig.2) をみると、次のような共通の傾向が認められた。すなわち、両方ともに不適切な発話の中で最も多かったのは文脈不適合独語で50～60％に達している。そして、質問のおうむ返し応答は25～30％を占め、単なるおうむ返しは不適切な発話の10～15％を占めている。最も少なかったのは不適切な応答であった。

特に、不適切な発話の内容においてＳ・Ｉ児の文脈不適合独語の多くは、テレビのコマシャルや他者が話したことばなどの遅延反響言語であった。これに対してＴ・W児は自分が強い関心をもっている自動車に関する独語が多かった。

2．発話の実用機能

Table 3 と Fig. 3 は、発話の中から伝達的発話と情報的発話を取り出してそれを実用機能によって分類したものである。(以下、伝達発話と情報的発話とを総称して適切な発話と呼ぶことにする)

対象児Ｓ・Ｉ児の発話において出現頻度が最も多いのは道具機能で、適切な発話の48.4％を占め、全発話の29.5％を占めている。次いで多くみられたのは応答機能であり、これは適切な発話の31.4％を占め、全発話の19.0％を占めている。そして、表示機能は適切な発話の16.3％を占めているが、その表示機能は個人的事象の表示だけ限定されており、外的事象を表示する機能は全くみられなかった。そのほか、規制機能が少しみられたが対人機能、報告機能、会話調整機能は全く見られなかった。つまり、Ｓ・Ｉ児は適切な発話の80.0％以上(195/233)を伝達のために使用しており、伝達的発話のうちでは話しかけが62.5％(122/195)を占め、応答機能が37.5％(73/195)を占めている(Table 1 参照)。
また、話しかけは道具機能と規制機能の２つの機能、すなわち、他者に何かするように要求したり命令したりするために使用されている。

対象児Ｔ・W児の発話においては表示機能が最も多かった。割合でみると表示機能は適切な発話の73.6％を

Table 3 適切な発話の実用機能別出現頻度

発話の類型	S.I 児(自閉症児)		T.W 児(自閉症児)	
	発話数	適切な発話*中の割合	発話数	適切な発話中の割合
道具機能	113	48.4(29.5)	9	1.3(1.1)
規制機能	8	3.4(2.0)	5	0.7(0.6)
質問機能	1	0.4(0.2)	95	14.3(12.2)
応答機能	73	31.4(19.0)	65	9.9(8.3)
対人機能				
報告機能			2	0.2(0.2)
会話調整機能				
表示機能	38	16.3(9.9)	491	73.6(63.4)
計	233	100.	667	100.

( )は全発話中の割合
* 伝達的発話と情報的発話の総称

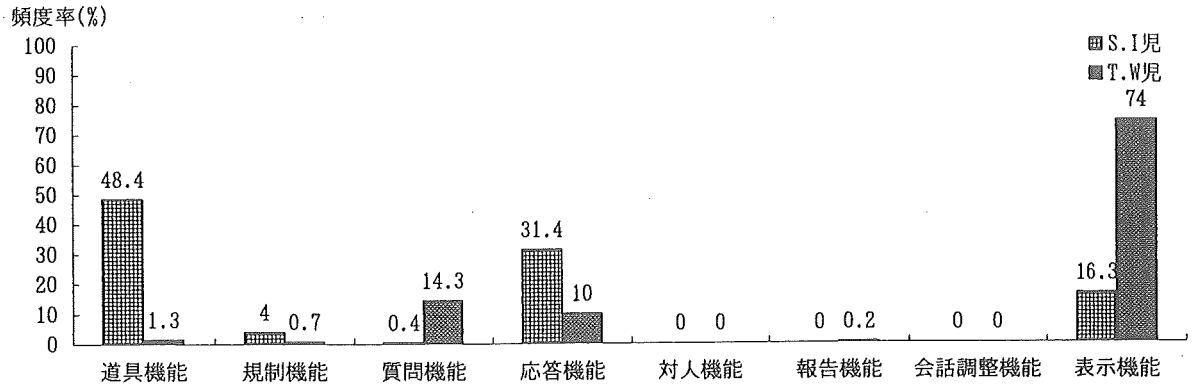

Fig. 3 適切な発話の実用機能別出現率

占め、応答機能は9.9%を占めている。話しかけの中では質問機能が最も多く逆に道具機能と規制機能は少なかった。このようにT・W児において適切な発話は対象児自身や周囲の事象を表示するために最もよく使われている。話しかけや応答のための発話もある程度みられたが、他者への話しかけは他者から言語的応答を得ようとした時に使用されることが多かった。T・W児の場合、表示機能が発話全体の中で極めて優勢な機能であり、その内容も個人的事象から外的事象までS・I児に比べ多様に表現されていることが観察された。

Ⅳ. 考　察

1. 伝達性と情報性からみた発話の全般的特徴

S・I児は約半数以上の発話を伝達的に使用している反面、不適切な用法の発話が全発話の約3分の1に認められた。発話の分類法が異なるため直接に比較することはできないが、S・I児における言語使用の全般的特徴はBaker や Cantwell らによる話しことばをもつ自閉症児の一連の研究結果とかなり類似しているといえる。

そして、S・I児においては4歳後期になっても不適切な発話が多く見られた。この点について話しことばをもつ自閉症児のうち、遅滞群に属する者では即時反響言語や独語などの自閉的言語症状が後までもある程度残存するとした西村・水野・若葉(1978)の知見を支持した。

一方、T・W児では伝達発話も少ないが不適切な発話も少なくその反面、非伝達的であるが文脈には適合する情報的な独語を非常に多く使用するという特徴が認められた。これは、Halliday(1975)が述べている言語の最も基本的な2つの機能、すなわち「対人機能」と「観念化機能」のうち後者の機能に非常に偏っていると解釈できる。

Blank ら(1979)は、伝達意図が乏しく自分の行為や周囲の状況などの非言語的文脈に関連することばだけを使

用する3歳の非自閉症児の事例報告を通して、言語の構造的側面と伝達的側面は異なる技能に基づいており、言語発達障害のある子どもではこの2つ側面が独立に機能している可能性を示唆している。

本研究の対象児T・W児に見られた「対人機能」が乏しく「観念化機能」に偏った言語使用の特徴は、Blankら(1979)の事例と同じように、両機能の調和のとれた発達が妨げられた結果生じたとも考えることができよう。

2．発話の実用機能の検討

S・I児は発話の半数が伝達的発話でその実用機能の特徴において、他者への話しかけが他者から物やサービスを得ようとする道具機能に集中していることが認められた。このことはS・I児の言語の実用機能が言語の最も原初的機能であり、既に Cunningham(1968)やWeiland& Legg(1964)が自閉症児の言語の特徴としてその使用の多さを指摘した要求や命令に極端に偏っていることを意味している。

T・W児において、話しかけとして産出した発話のなかで最も多かったのは、質問機能をもつ話しかけであった。この以外の機能としては道具機能、規制機能もみられごくわずかであったが報告機能も観察された。またT・W児では、質問機能への偏りが見られたがS・I児における道具機能のように極端に偏っているわけではなかった。

そして、対人機能においては両症例ともに見られなかった。一般的に対人機能は健常児の言語発達過程では非常に早期から出現する機能の1つであり(Halliday,1975)、他者への呼びかけは1語期の早期から出現し、呼びかけ＋1語発話の形をした2語発話は最も初期の2語発話として頻出することがよく知られている(Werner & Kaplan,1974;村井,1970)。こうした対人機能が両症例に共通的に見られなかったのは、発話収録場面が日常生活場面でなかったという理由だけによるのではなく、自閉症児の発話の実用機能の特徴が現れた結果であると考えられる。

また、話しかけと並びに会話のもう1つの主要な側面である応答発話の機能についてみると、両症例はともに治療者の質問に対して情報を提供する応答、母親の言ったことばを引き継いでそれにことばを続けていく付加的応答、母親のことばをそのまま反復していう反復的応答を比較的よく行っている。

しかし、このような反復的応答や付加的応答がどのような文脈で出現したかについては、両症例間に差異が認められた。S・I児の応答は被誘発的応答、すなわち、母親が子どもに応答させようとして意図的、積極的に働きかけた場合に起こっていた。これに対してT・W児では、そのほとんどが自発的に応答したものである。特にT・W児の付加的応答は、質問形式以外の母親のことばに対してそのことばを引き継いで会話を展開しようとしたものであり、これは会話能力の発達にとって重要な意味を持つと考えられる。また、反復的応答においては母親のことばを意味も分からずに反復する単なるおうむ返しでなく、母親のことばとそれに伴う非言語的行動を含む母親の行動全体を模倣したものであった。これは、こどもが母親と同一の世界を共有しようとしていることの表れであると思われる。実際臨床場面において治療者は、このような子どもの行動をおうむ返しとしてでなく、場面への積極的参加と見なすことによって遊びの展開を図ることも必要であろう。つまり、他者の行動とことばを一緒に反復しようとする同化的模倣はことばや行動の意味を学習するのに役に立つと考えられる。

一方本研究では、非伝達的であっても非言語的文脈と結びつきのみられた独語は、情報的発話として非伝達的発話から分離された。このような情報的発話は他者へ働きかけるための言語ではないが、自分を含む現実世界の一部を「表示する」機能をもつと考えられる。

S・I児については、表示機能をもつ発話はあまり多くみられなかったが出現した表示機能の発話はすべて対象児自身が実行したり、実行しようとする行為や行為の中に含まれる内容を表示したものである。このように、自分の行為を表示する発話は要求を表す発話と並びに初期言語の最も基本的な機能とされている。しかし、この発話の中に発話を発した後すぐに行為の実行に移らないで母親の反応を待つ発話も含まれている。
このような発話は後に伝達意図のある話しかけへと発達していくと考えられる。

T・W児では、表示機能を持つ発話が発話全体の中で最も多くの発話であった。この症例においても表示機能の発話と子ども自身の行為との結びつきの強さが認められた。また、これ以外に子ども自身の行為とは直接結びつきのない外的事象を表示する発話もかなり観察された。

このことからT・W児は、自分の周りを取り囲んでいる事象に対してS・I児よりも多くの関心や認識をもっていると思われる。

V. 要約と結語

本研究では、1語発話期にある自閉症児における音声並びに非音声レベルのコミュニケーション機能を分析し、自閉症児の言語発達の特徴とコミュニケーション機能の偏りを検討した。主要結果は次の通りである。

1）発話の伝達性と情報性

① S・I児の場合、伝達的発話の頻度(50.8%)が最も多く不適切な発話は 36.1%、情報的発話は 9.9%で非常に少なかった。

このようにS・I児は言語を伝達的に使用している反面、不適切な発話も多く見られた。

② T・W児では情報的発話が全発話の63.4%、伝達的発話は22.6%、不適切な発話は11.9%を示された。特にT・W児においては、適切な発話が少ない一方で伝達的発話もあまり多くなく、その代わりに非言語的文脈に適合する独語が多かった。

③ 不適切な発話の下位型の内訳をみると、両症例ともに最も多かったのは文脈不適合独語(54.6%,56.1%)であり、質問のおうむ返しが各々27.4%、25.3%、最も少なかった のは不適切な応答(5.7%,3.2%)であった。

④ 不適切な発話の内容についてS・I児はテレビのCMや他者が話したことばなどの遅延反響言語が多く、T・W児は自分が強い関心をもっている自動車に関する独語が多かった。

2）発話の実用機能

① S・I児の発話において出現頻度が最も多かったのは道具機能(48.4%,全体の29.5%)であり、次いで多く見られたのは応答機能(31.4%,全体の19.0%)、表示機能は16.3%を示された。特に、表示機能は個人的事象の表示だけ限定されており、外的事象を表示する機能は全く見られなかった。つまり、S・I児は適切な発話の80%以上を伝達のために使用しており、話しかけは道具機能と規制機能すなわち、他者に何かするように要求したり命令したりするために使用されている。

② S・I児では対人機能、報告機能、会話調整機能が全く見られなかった。

③ T・W児の発話では表示機能が73.6%、応答機能は9.9%を示された。

話しかけの中では質問機能が最も多く、道具機能と規制機能は少なかった。

④ T・W児において適切な発話は、対象児自身や周囲の事象を表示するために最もよく使われている。話しかけや応答のための発話もある程度みられたが、他者への話しかけは他者から言語的応答を得ようとした時に使用されることが多かった。

またT・W児の場合、表示機能が発話全体の中で極めて優勢な機能であり、その内容も個人的事象から外的事象まで多様に表現されていることが観察された。

以上の結果から次のことが指摘された。

第1に、伝達的発話において健常児と言語発達遅滞児は年齢上昇に伴う発話量の増加が認められたが（李,1999)、自閉症児においては年齢上昇に伴う発話量の増加が認められなかった。

第2に、本研究の自閉症児（S・I児）においては、4歳後期になっても不適切な発話が多く見られた。この点について話しことばをもつ自閉症児のうち、遅滞群に属する者では即時反響言語や独語などの自閉的言語症状が後までもある程度残存するとした西村・水野・若葉(1978)の知見を支持した。

第3に、本研究の自閉症児における話しかけの実用機能の特徴としては、他者から物やサービスを得ようとする道具機能に集中していることが認められた。また、応答的発話においてもほぼWH機能に限られている特徴が見られた。このようなコミュニケーション機能の偏りは、本自閉症児のコミュニケーション行動の問題の1つであると思われた。

第4に、本研究の自閉症児におけるコミュニケーション行動の第2の問題は、自発的発話がこだわりで代表される興味・関心の狭さと結びついており、かつ言語表出がパターン化された紋切り型のスタイルをとっていることと考えられた。

第5に、言語発達遅滞児や健常児の場合も自閉症児と同様に母親のことばを即時に模倣する行動が見られたが、このような行動の多くは母親の仲介によりことばのやりとり遊びへ発展していった。しかし自閉症児の場合、ことばの模倣がやりとり遊びへ発展することは全く見られなかった。このような問題も本自閉症児で観察されたこだわりで代表される興味・関心の狭さと関連しているように思われた。

本研究では、わずか2名の症例の発話を分析するにすぎないが、ここで用いられた発話の機能の分類範疇は自閉症児以外の言語発達過程の記述にも適用可能であろうと思われる。また、自閉症児における「相互作用的伝達過程」とその発達に関する研究の端緒になるものと考えられる。

参考文献

Bates, E. (1976a): Language and context: The acquisition of pragmatics. Academic Press, New York.

Bates, E. (1976b): Pragmatics and sociolinguistics in child language. In Morehead, M.,& Morehead, A. (Eds.) Language Deficiency in Children: Selected Reading. 411 - 463, University Park Press, Baltimore.

Bernard - Optiz, V. (1982): Pragmatic analysis of the communication behaviour of an autistic child. Journal of Speech and Hearing Disorders. 47,99 - 109.

Dore, J. (1975): Holophrases, speech acts and language universals. Journal of Child Language, 2,21 - 40.

Dore, J., Gearhart, m.,& Newman, D. (1978): The structure of nursery school conver - sation. In Nelson, K. (Ed.) Children's Language, Vol.1, Gardiner Press, New York.

Halliday, M. A. K. (1970): Language structure and language function. In Lyons, J. (Ed.) New Horizons in Linguistics. Penguin, Harmondworth. (田中春美監訳:現代の言語学.大修館書店, 1973)

Halliday, M.A.K.(1975): Learning how to mean: Exploration in the development of Language. Arnold, London.

小林重雄・佐竹真次・前川久男・進藤桂子(1988)：乳幼児コミュニケーション発達検査にみられる言語発達遅滞児の伝達行動の変化.「障害幼児を中心とした治療教育法の開発と統合化に関する研究」,昭和62年度厚生省心身障害研究報告書,93 - 102.

李玄玉(1997):自閉症児の相互作用的な伝達機能に関する行動論的アプローチ.筑波大学大学院博士論文.

李玄玉(1999):言語発達遅滞児のコミュニケーション機能に関する研究.九州看護福祉大学紀要,1(1),267 - 273.

McShane, J. (1980): Learning to Talk. Cambridge University Press, Cambridge, Mass.

村井潤一(1970)：言語機能の形成と発達.風間書店.

Packer, M. J. (1983): Communication in early infancy: Three common assumptions examined and found inadequate. Human Development, 26, 233 - 248.

Rutter, M., Mawhood, L., and Howlin, P. (1993): Language delay and social development. Specific Speech and Language Disorders in Children. Fletcher, P. (eds.), London: Whurr Publishers. 63 - 78.

綿巻　徹(1981)：初期文法獲得期の発話の数量的特性.日本心理学会第45回大会発表論文集,506.

綿巻　徹(1983)：統語発達に遅れのある就学前精神遅滞児の言語－会話構造と一語発話の実用機能－.昭和57年度文部省科学研究費「発達障害児に対する言語能力の形成　プログラムの開発に関する教育心理学的研究」報告書,81 - 98.

山根律子・河合万里絵・金谷京子・澤田俊子・松崎みどり(1986)：言語発達遅滞児の言語使用における発達的特性.第24回日本特殊教育学会大会発表論文集,390 - 391.